

ベリーショート賞

ゆずこじょう

柚子抄



尾藤康博

卓上には四角い小瓶があつて、その中身は柚子胡椒だという。

それは九州の名物で、九州なんて私も彼も縁がない土地だけれど、彼はどこで覚えたのか柚子胡椒が好きだから近くのスーパーマーケットでよく買って帰った。

「これおいしい、初めて食べた」

テーブルの向かいにはいつも通り彼女が座っている。

「でしよう？」

彼はいくらか自信を得たようだった。私もその、竹輪の穴に胡瓜の細切れを挿し込んだだけの簡単な手料理に、先刻の柚子胡椒をべつたりと塗りつけて嚙り、安い発泡酒で流し込んだ。それをずっと見ていた彼が「おまえもなんか言えよ」とせかしてきて、

「うん、確かにうまい」

なんだかひどく無愛想に答えてしまつて、でも本当はうまいものだったから失礼なことをしたと思つて彼を見たら、無言でまた皿を差し出してきたのでまた竹輪をつまみ柚子胡椒くぐらせて口に運び、

「うまい」と馬鹿の一つ覚えみたいに繰り返した。

「もつとこつと、テレビ番組のリポートみたいにはできないの？」

彼女が笑いながら言った。私は精一杯の好い声で、

「見てください、このおいしそうな柚子胡椒」

と箸に挟んだまま竹輪を蛍光灯にかざして天を仰ぎ、二人から予想通りの失笑を買った。

彼女の名前は柚と書いてユウである。私と彼は戯れにユズと呼んでいる。もちろん彼女の名前と今卓上の柚子胡椒とは何の連関もない。そして彼というのは私の古い友人で、ユズと知り合う前から柚子胡椒が好きだったし、そうしてこれはまた別の話になるけれども今はユズのことも好いている。彼とユズは時折頭を撫でながら甘言ささやきあつていて、そういうときだけ本当は居づらいのだけれど、もうだいたい慣れてしまつて私も特段言及しなくなつた。最初の一ヶ月くらいとても衝動的に映つた二人の愛情表現のようなものは、いつの間にかこの三人の関係のエッセンスになつていて、楽しそうな二人とそれに見て見ぬふりをする私という構図に落着しつがある。見ないふり、というのもまた嘘で、怖いくらいにじろりとにらみつけたことも何度かあるのだけれど、向こうはもちろん私など気にもかけていないから、私が見ていないと言えば「ああ見えていなかったの

か」と納得するだろうし、真相はつまり私だけが知るところである。私は日がな暮らしが荒んでいる学生だから朝から何も食べないままに、いつものように何の打ち合わせもなく彼の家へ発泡酒の六缶パックを抱えて出かけて行って、彼が作る料理をもらいながら酒をあおることにした。まるで誘い合わせたかのようにユズはそこにいたし、いや交際してるのだからそれも当然だと思ふけれど、こうして私だけが、幸せになれない関係が、一客の四角い食卓の上に今宵もまた幕を上げることとなった。

いよいよ話題尽くして、ユズの専攻する哲学の迂遠な命題と解釈を話し出す頃合いにいたっては酒のせいで私ももう眠くて仕方がなくて、テーブルに伏せながら携帯電話であてもなくネットサーフィンしながら聞き流した。彼女は今晚もディオゲネスを語っていた。そして私の次の記憶は午前4時まで飛んだ。頭を支えて痺れた腕さすりながら見渡せば誰の仕事か部屋の明かりは落とされていて、何気なく触れた携帯電話の画面の明るさに目が眩む。テーブルの周りには料理が出しっぱなしだったが彼と彼女の姿は無く、ちよつと寂しさ覚えつつまた寝ようかと思ひ始めた矢先に、ラグマットの上にもつれる二人の影を認めてすこし狼狽したが声は出なかった。彼と彼女は私が起きていることなど気づいていない。あるいはどうでもいいのかもされない。窓から差し込む光だけで妙に青白い二つの身体はそれでひとつの生命ではないかと思われるくらい近く、同化していた。私は残っていた発泡酒一口含むと静かに彼と彼女を観察した。もはやなんらの興奮も熱狂もなく、眼前で行われてい

るホモサピエンスの交接を動物図鑑の1頁のように見下ろして、いま私はどんな顔をしているのか、そちらのほうが気になる。狭い七畳間で、私だけが別世界から来たような断絶を八方に感じた。三人称の視点はいやに冷めている。次第に飽きてきたテーブルに伏せようとする。と、このどうしようもなく甘ったるい匂いに混じって何か鋭く香るものがあつた。あの柚子胡椒だ。テーブルに額をくつつけたまま、茶色い小瓶をゆっくりと顔の前に運んでいった。冴えている。私の周囲はたちまち柚子胡椒の甘辛いアトモスフィアに包みこまれた。

(柚、ねえ)

思い出したように暗いテーブルに手を伸ばせば、まだ例の竹輪料理が皿に盛りだまま在る。

私はそれをとって、柚子胡椒を小瓶から直に振りかけて、山盛りのペーストをその香りに口へ放り込んだ。

しゃくしゃく、胡瓜が噛み潰されていく音と一緒に痛いくらいの気が鼻を抜ける。

「お前、起きてたのかよ」

慌てた声がする。現実であるかどうかは定かでない。あらゆる事象は甘辛さの外に隔絶せられて、私一人と夜明け前の青白い風とがあるだけだった。